

# 能力の自己評価に関する研究

— 自己査定理論と自己防衛・高揚理論 —

深田博己・越 良子

(1988年9月8日受理)

Self-evaluation of abilities: Self-assessment theory and self-protection-enhancement theory

Hiromi Fukada and Ryoko Koshi

This article reviewed recent four theories about the self. Self-assessment theory (Trope, 1975) assumes that a person is motivated to assess his/her own ability and that he/she selects tasks to reduce uncertainty of his/her ability level. Self-evaluation maintenance model (Tesser & Campbell, 1982) presumes that a person is motivated to maintain self-evaluation positively and thereby change perceptively or actually one of following three factors; other person's closeness, performance, task relevance to self. Self-serving bias (Bradley, 1978) means that one attribute success to internal factors and failure to external factors. Self-handicapping strategy (Jones & Berglas, 1978) is to give handicaps to the self beforehand and it increases the possibilities that self-serving bias takes place. These four theories have been respectively supported by several studies. These four theories can be classified into two categories; one is related to assess the self and the other is related to protect or to enhance the self. When we consider the apparent order of the phenomena relevant to the self, self-assessment is assumed to be the prestige of self-protection or self-enhancement.

Key words: self-evaluation, self-assessment, self-evaluation maintenance, self-serving bias, self-handicapping strategy, protection, enhancement

## 1. 自己評価の2つの目的

人が適応生活を送るためには、自分の周囲の状況や環境のみでなく、自分が何であるのか、この状況の中で自分に何ができるのかといった、自分自身についての十分な知識を持っていることが必要である。そのような自己に関する概念を持ち自己評価 (self-evaluation) をすることは、他者の影響を受ける。なぜならば、自己評価とは自分自身を価値的に把握することであり、その際の価値付けの基準は、多くの場合、他者から得られる、あるいは他者から学習され自己の中に内化されているものだからである。

他者に基準をおいた自己評価方法に関する理論の一つとして、社会的比較過程の理論 (Festinger, 1954) がある。この社会的比較過程の理論とは、以下の3つの基本的仮定からなる。①人間には、自己の能力や意見を明確に評価しようとする欲求がある。②その際、自己評価を物理的、客観的基準によって行いが、それ

がないときには、多くの他者の意見や能力と自己のそれとを比較することによって自己評価する。③さらに、その際、自己に類似した他者が比較対象として選択されやすい。なぜなら、自己とかけ離れた諸特性や能力の他者と自己を比較しても、自己評価が必ずしも明確にならないからである。すなわち、社会的比較過程の理論によれば、社会的比較は、物理的、客観的評価基準の代わりに用いられる、評価基準を得るためのものである。

しかしながら、Gargen(1984)によれば、社会的比較の過程において、ある課題でのパフォーマンスを比較する際、対象としてだれを選択するかによって自己の成績の良し悪しの評価は異なる。また、他者の能力を何に帰属するかによってその他者との比較による自己評価は異なり、さらに、そうした比較は、推測に頼らざるを得ないことが多い。つまり、他者と自己を比較する方法によっては、自己評価は異なるものになるのである。これは、逆に、どのような自己評価を得た

いのかによって、他者と自己を比較する方法が異なることをも示唆する。すなわち、社会的比較過程において、どのような自己評価を得たいのかといった評価の目的によって、自己評価の方法が異なると言えよう。この評価の目的は、自己がどのような欲求状態にあり、どのような社会的状況（他者、場面）にあるのかなどに影響される。

では、自己評価の目的には、どのようなものがあるのか。ここで、もう一度社会的比較の理論について考えてみると、社会的比較過程に、すでに異なった種類の自己評価方法がとられていることがわかる。この理論においては、人は、物理的、客観的評価基準のない場合、自己と類似した他者を比較対象とするとされる。さらに、特に能力の比較においては、自己より優れた他者との比較と、劣った他者との比較がなされる場合があるとされている。自己より優れた他者との比較は向上性の欲求、劣った他者との比較は自己防衛の欲求によってなされる。このことから、能力の自己評価に関して、①自己の能力レベルを正確に知ること、すなわち自己査定を目的とするもの、②自己評価に際して、自尊感情の防衛あるいは高揚を目的とするもの、の2つがあると考えられるのである。

近年、前者の自己の能力レベルを正確に知ることを目的とした自己評価について、自己査定理論 (self-assessment theory) が提出されている。これに対して、後者の自尊感情の防衛あるいは高揚を目的とした自己評価に関連して、自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model)、セルフ・サービング・バイアス (self-serving bias)、セルフ・ハンディキャッピング方略 (self-handicapping strategy) などが報告されている。これらは、以後、一括して、自己防衛・高揚理論と呼ぶ。

本研究では、この2つの自己評価の目的に関する理論として、これら4つの理論を紹介し、その関連について考察する。なお、本研究では、能力に関する自己評価についての研究を取り上げることにする。

## 2. 自己査定理論

自己査定理論は、Trope(1975)によって提出された、自己評価と課題選択に関する理論である。課題選択については、達成動機の研究において、Atkinson(1957)によって、達成動機の方が失敗回避動機よりも高い人は、成功確率50%の課題を選択するという報告がなされており、その説明理由は、成功による喜びや失敗による不快感、あるいは誇りや恥に求められている。これに対して、この自己査定理論の基本的仮定

は、人は、自己の能力の不確かさ (uncertainty) を低減させるような行為を行い、課題遂行に際して、課題選択は自分の能力レベルの不確かさがどの程度除去されるかに依存する、というものである。すなわち、課題選択は、自尊感情の防衛あるいは高揚と無関係に、自己の能力レベルを明らかにするためになされるのである。この基本的仮定に基づいて、以下のような3つの仮説が示されている。①その課題を遂行した結果によって能力レベルが判別される程度、すなわち課題の判別度 (diagnosticity) の高い課題が選択される。②自尊感情の防衛あるいは高揚に無関係な状況にあれば、課題遂行の結果、自己の能力レベルが高いと判別される場合と低いと判別される場合のいずれにおいても、判別度の高い課題が選択される。③自己の能力レベルが確かな領域と不確かな領域がある場合、すでに確かな能力を判別するための課題よりも、不確かな能力を判別するための課題の方が、より多く選択される。これらの仮説を検討するため、いくつかの研究がなされている。なお、自尊感情の防衛あるいは高揚に無関係な状況とは、主に、被験者に、自我関与の低い課題を遂行させる、競争を意識させずに単独で課題を遂行させる、などの方法によって操作されており、自尊感情の防衛あるいは高揚の必要な状況は、主に、被験者に自我関与の高い課題を遂行させる、成績を他者と比較させる場面を設定するなどの方法によって操作される。

### (1) 課題の判別度と課題選択

Trope & Brickman(1975) は、課題遂行の結果から能力の高低が明らかになる程度、すなわち課題の判別度が課題選択に及ぼす影響について検討した。彼らは、大学生を対象に、統合的志向性 (integrative orientation) についてのテストであると称した課題を呈示した。その際、統合的志向性とは既知の情報から新しい情報を取り出したり問題を解決したりする能力であると教示した。つまり、自己の能力を正確に知りたという欲求を高め、しかも自己防衛あるいは高揚の不必要な状況を設定したのである。呈示した課題は3種で、各課題は16項目からなるものであった。このとき、課題において、課題の成功確率と判別度を操作した。まず、成功確率については、3種の課題がそれぞれ70、50、30%の成功確率であると明記してある。判別度については、さらに、能力の高い人の成功確率 ( $P_s/h$ ) と能力の低い人の成功確率 ( $P_s/l$ ) を示すことによって操作した。例えば、 $P_s/h=70\%$ 、 $P_s/l=70\%$  ならば、その課題では能力の高低にかかわらず良い成績をおさ

めることが可能であり、したがってその課題は能力の高低を判別できない。Ps/h=70%, Ps/l=30%の場合、能力の高い人の方が成功確率が高いため、良い成績をおさめた場合、能力が高いと考えられやすく、逆に能力の低い人の方が成功確率が低いため、悪い成績をとった場合、その人は能力が低いと推測でき、したがって判別度は高いと言える。そして、各課題ごとに何項目を遂行したいと思うか、その項目数を答えさせた。また、3課題のうち、いずれかひとつを但し全項目遂行するとしたら、どの課題を選択するかについても回答を求めた。

その結果、判別度の主効果が見いだされ、成功確率50%の課題は、それが判別的であるとき、成功確率30, 70%の課題よりも多く選択され、さらに、成功確率が30, 70%の課題が判別的であるとき、成功確率50%のものより多く選択された。この結果から、成功確率50%の課題が必ずしも多く選択されるのではなく、成功

確率が30%や70%であっても判別度が高ければ選択されることが明らかにされ、仮説が支持されたのであった。

## (2) 明らかになる能力レベルと課題選択

このように、自己に関する正確な知識を得るために課題選択がなされることは示唆された。しかしながら、この自己査定欲求は、自尊感情を防衛あるいは高揚する必要のあるとき、どのように作用するのであろうか。

この点について、Trope(1980)は、遂行結果から判別される能力の高低を被験者に呈示することによって検討している。仮説は、ある課題における成績の良し悪しが能力の不確かさを等しく除去するかぎり、予想される成績の良し悪しは、課題選択に等しく貢献する、というものであった。これに先んじて、Trope(1979)は、課題における能力の判別度には4つの種類があることを指摘している (Fig. 1)。Fig. 1

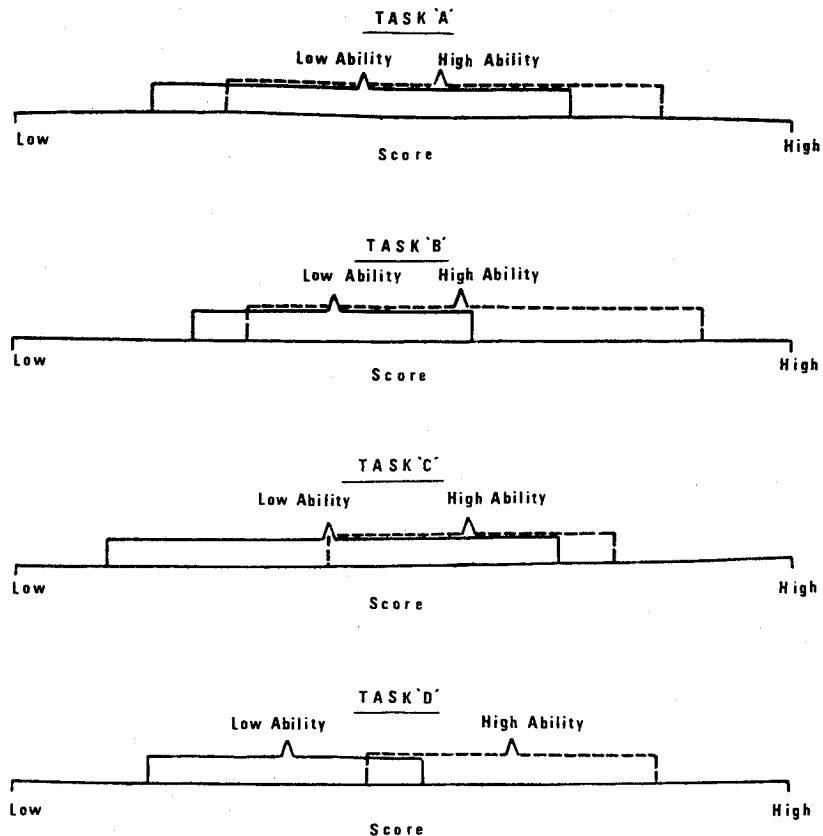


Fig. 1 Hypothetical score distributions for tasks varying in diagnosticity of low scores and diagnosticity of high scores. In task A both low and high scores are of low diagnosticity; in task B only high scores are highly diagnostic; in task C only low scores are highly diagnostic; in task D both low scores and high scores are highly diagnostic (Trope, 1983).

の4つの課題は、それぞれ能力の高い人、低い人の得点可能範囲を示している。そして、課題Aでは、能力の高い人と低い人の得点範囲がほとんど重なり、したがって、その課題を遂行してどのような得点をしたとしても、自分の能力レベルが明確にならず、課題Aの判別度は、高低いずれの能力に関しても低いと言える。また、課題Aにおける、高得点、低得点の判別度（高得点、低得点であることが能力の高低を示す程度）も低いと言える。課題Bでは、能力の高い人、低い人の得点範囲の重なりが高得点部分で少なく低得点部分が多い。したがって、課題遂行の結果、高得点をとった場合、能力が低い可能性が比較的確かになる。しかし、低得点をとった場合には能力が高い可能性は除去されない。つまり、課題Bは高い能力については判別度が高く、低い能力については判別度が低い。また、高得点の持つ判別度は高く、低得点の判別度は低い。課題Cは、課題Bと逆に、高い能力については判別度が低く、低い能力については判別度が高い。また、高得点の判別度は低く、低得点の判別度は高い。課題Dは、能力の高い人、低い人の得点範囲の重なりが最も少なく、したがって、高得点をとった場合には能力の高い可能性が、低得点をとった場合には能力の低い可能性が高く、高低いずれの能力についても判別度は高い。そして、高低いずれの得点も判別度は高いのである。これらの課題において先の仮説に基づいて選択頻度を予想すると、 $D > B = C > A$ となる。

実験は、大学生を対象に、目と手の協応ゲームを課題として行われた。ゲームは、スクリーン上に出るターゲットを手もとのハンドルで捕らえ、2分間に捕らえていた時間を測定するものである。実験の名目は、ゲームに対する潜在的消費者の態度に関する研究であった。課題における高得点、低得点のもつ判別度の操作は、能力の高い人、低い人それぞれの最高点と最低点を課題ごとに図示し、スケール上の重なり部分を示すことにより行った。実験計画は、高得点の判別度（高、中、低）×低得点の判別度（高、中、低）であり課題は9課題であった。各課題を呈示した後、課題を遂行したいと思う程度の回答を求めた結果、高得点の判別度に関しては、判別度の高い課題ほど高く評定され、低得点の判別度に関しても、判別度の高い課題ほど高く評定された。自尊心の防衛あるいは高揚を目的とするならば、低得点をとることによって能力の低いことが明らかになる。低得点の判別度の高い課題は好まれないはずであり、したがって、ここでも自己査定理論の仮説が支持されたのである。

ところで、(1)と(2)で述べたこれらの研究は、自尊心を防衛あるいは高揚する必要のない状況において、

自尊心を低める可能性があっても、自己査定の課題選択を示し、自己査定理論が自己防衛・高揚理論よりも予測力のあることを明らかにしたのであった。しかしながら、これらにおいては、課題が自尊心に無関連なものであり、被験者は実際に課題を遂行することを予想せずに課題選択をしていた。つまり、自己にとって脅威となるような情報をもたらす課題を避ける理由がないのである。すなわち、これらの研究で自己査定理論が支持されたのは、自己防衛的あるいは高揚的な欲求の作用する状況ではなかったからではないかと思われるのである。自分が自信を持っている課題であるとか、他者と競争的な状況にあるなど、自尊心を防衛あるいは高揚する必要のある場面でも、同様な自己査定の課題選択がなされるのであろうか。

そこで、Strube, Lott, Lê-Xuân-Hy, Oxenberg, & Deichmann(1986)は、大学生を被験者とし、課題を大学生にとって、より自己関与できるようなグローバルな認知能力テストとし、課題に対する好みや課題を遂行したいと思う程度を評定した後に実際に課題を遂行して貰うことをあらかじめ教示して、課題の持つ高得点の判別度、低得点の判別度、課題の困難度を操作した実験を行った。その結果、課題の好みにおいて、高得点の判別度、低得点の判別度とも、それぞれ高い方が好ましいと評定され、なかでも、高、低両得点において判別度の高い課題が最も好まれた。また、課題選択においても、高得点、低得点それぞれの判別度の高い方が多く選択された。また、困難度と判別度の交互作用がみられ、高得点の判別度の高いときに、低いときと比べ、より容易な課題が選ばれた。また、低得点の判別度が低いときには、高いときと比べて、容易な課題が多く選択された。次に、被験者による課題の判別度の認知と課題選択についてみると、同様に、最も多くの被験者が、認知された判別度の最も高い課題を選んだ。しかし、能力の低さがわからないような課題を選んだ人の半数は、それが判別的であると認知しているが、半数は、判別的でないとして認知しており、必ずしも自己査定理論の仮説通りの結果ではなかった。しかしながら、最も判別的と認知された課題を選択した人は偶然確率より有意に多く、自己査定理論の仮説を支持する結果も得られたと言える。

このように、被験者の認知レベルでは、自己査定理論からの予測が成立する被験者と、自己防衛・高揚理論からの予測が成立する被験者が、それぞれ存在すると確認され、個人差の問題が示唆された。しかし、結果全体から判断すれば、自己防衛あるいは高揚の必要のある状況においても、自己査定の嗜好をする人が

多く、自己査定理論の方がより予測力が強いと結論された。

### (3) 能力レベルの不確かさと課題選択

自己の能力レベルの不確かさと課題選択の関連については、Trope & Ben-Yair(1982) によって報告されている。被験者は士官学校生で、これは心的能力に関する研究であり、結果は本人には伝えるが、教師には教えないことを教示した。課題は2つあり、1つは分析能力、もう一つは心的柔軟性を測定するもので、それぞれ18問からなっている。この2つの能力は互いに無関連であり、また、他の学力や知能テストでは測定できないものであることを教示した。これらの課題遂行後、不確かさの操作として、2つの課題について、それぞれ偽の得点をフィードバックした。不確かさ低条件では、18問のうち1または2問の答えが被験者の能力の低いことを示し、15または16問の答えが中程度の能力であることを、残りの1または2問の答えが高い能力であることを示していると伝えられた。不確かさ高条件では、18問のうち5または6問の答えが被験者の能力の低いことを、6または7問の答えが中程度の能力であることを、5または6問の答えが高い能力であることを示しているとフィードバックされた。このような操作が分析能力、心的柔軟性課題のそれぞれにおいて行われ、したがって、実験条件としては、分析能力についての不確かさ(2)×心的柔軟性についての不確かさ(2)の4条件が設定された。その後、別室で、別の実験者が、分析能力と心的能力に関する類似した課題を与え、その課題で自分が遂行する項目を各自に決定させた。その際、どちらの課題からいくつ選択しても自由だが、合計で20項目にするよう教示した。また、2つの課題のうち、どちらかひとつを遂行しなければならないとしたら、どちらを選択するかについても回答を求めた。

その結果、項目選択数においては、能力の不確かさと課題の交互作用がみられた。すなわち、第1回目の分析能力課題での能力の不確かさが高くなるほど、第2回目の分析能力課題からの項目選択数が増加し、心的柔軟性課題からの選択数が減少し、逆に、第1回目の心的柔軟性課題での能力の不確かさが高くなるほど第2回目の心的柔軟性課題からの選択数が増加し、分析能力課題からの選択数は減少した。また、課題選択については、両能力についての不確かさの程度が異なるときに、不確かな能力を測定する課題が選択されることが明らかにされた。

### (4) 自己査定における個人差

ところで、Strube et al.(1986) の結果から、自己防衛的あるいは高揚の状況において、自己査定の選択をする人が最も多かったが、一方で、自己防衛・高揚的な選択をする人もいることが認められた。すなわち、このことから、自己査定における個人差研究の必要性が指摘される。

例えば、Sorrentino, Short, & Raynor(1984) は、不確かさに対する志向 (uncertainty orientation) と課題遂行の関連を検討している。それによると、不確かさに積極的に直面し、それを解決しようとする志向の高さにも個人差があり、その高さの違いによって、達成関連動機とパフォーマンスの関連も異なる。Trope(1980) は、高達成動機の人、低達成動機の人と比べ、課題の好みにおける判別度の主効果がより明瞭であるとし、また、Strube, Boland, Manfredo, & Al-Falaij(1987) は、タイプAであるかタイプBであるかによって、課題選択に違いのあることを報告している。すなわち、タイプAの人において、タイプBの人と比較して、自分の能力が不確かな領域の課題から、遂行項目を選択する人が多かった。つまり、タイプAの人はタイプBの人と比較して、不確かさを除去しようとする傾向の強い人が多いと言えよう。

自己査定への欲求が低いことはすなわち自尊感情の防衛あるいは高揚への欲求の高いことを意味しないけれども、少なくとも、自己査定の欲求の高さに個人差があり、それによって、課題選択などに違いが生じることが示唆されている。

## 3. 自己評価維持モデル

このような自己査定理論における自己に関する正確な知識への欲求に対して、自己評価のもうひとつの目的として、自尊感情の防衛あるいは高揚がある。

以下では、この自己防衛あるいは自己高揚の欲求を基本的仮定においた自己評価に関する理論として、対人場面における認知を主に問題とした自己評価維持モデルについて述べる。

自己評価維持モデル (Tesser & Campbell, 1982) は、①人は、肯定的な自己評価を維持したいという欲求を持っている。②親密な他者ほど自己評価に大きな影響を及ぼす、の2点を基本的仮定とする。そして、他者と自己との心理的な近さ (closeness)、ある課題での、その他者と自己のパフォーマンス、その課題と自己との関連性 (relevance) すなわち自己にとっての課題の重要性、の3つの要因のいずれかを認知的あるいは行動的に変えることによって、人は自己評価を維

持しているとする。これらの認知的または行動的变化は、この3要因のうち2つが決定すれば予測できる。その際、自己評価維持には2つの過程、反映過程と比較過程が生じる。反映過程とは、他者の優れたパフォーマンスの反映された名誉に浸ることであり、比較過程は、自他のパフォーマンスを比較することである。課題と自己との関連性が高いときには比較過程が生じやすく、関連性の低いときには反映過程を生じやすい。そして、それぞれの過程において、自己評価を維持するために、他者の心理的近さ、パフォーマンス、関連性を認知的に、または行動的に変えるのである。例えば、心理的近さについては、他者のパフォーマンスが自己のそれより高いとき、その課題の関連性が高ければ比較過程が生じて心理的近さは減少し、関連性が低ければ反映過程が生じて心理的近さは増加する。他者のパフォーマンスについては、その他者と心理的に近いとき、関連性の高い課題では、相対的に自己のパフォーマンスを高く認知し、他者のパフォーマンスを低く認知する。関連性の低い課題では、自己のパフォーマンスを低く認知し、他者のパフォーマンスの方を高く認知する。課題と自己の関連性については、他者と心理的に近いとき、他者のパフォーマンスの方が自己のそれより高ければ関連性を低く認知し、自己のパフォーマンスの方が他者のそれより高ければ関連性を高く認知する。他者の心理的距離が遠い場合、他者のパフォーマンスが自己のそれより低い場合は、肯定的自己評価の維持に無関係であるため、それぞれの場合での他の2要因は変化しない。

#### (i) 心理的近さ

この仮説を検証するため、Tesserらは、いくつかの研究を報告している。Pleban & Tesser(1981)は、心理的近さの変化について検討した。彼らは、男子大学生2人を1組として、クイズ競争を行わせた。但し、2人のうちの1人は実験協力者であり、また、課題は被験者にとって関連性の高いトピックスに関するものと関連性の低いトピックスに関するものの2種類で、被験者は、ランダムに半数ずつ、いずれかの課題を割り当てられた。パフォーマンスは、操作的に、被験者においては良くも悪くもない50%の成績であるようにし、実験協力者においては、20、40、60、80%の成績となるようにした。課題終了後、別室に移り、質問紙に回答を求めた。その際、まず実験協力者が先に入室し、あらかじめ決められた席に着席し、次に入室した被験者が室内に半円状に並べられた席のどこに着席するかが観察された。このときの被験者と実験協力者との距離が、心理的近さの測度とされた。また、質問紙

によって、実験協力者に対する好意度、実験協力者との類似度、またこの人と同じクイズをやりたいかを尋ねた。

その結果、自己との関連性の高い課題では、他者のパフォーマンスが高いほど、被験者は他者との心理的近さ、類似度、また一緒にやりたいかどうかの3測度において、その他者から遠ざかろうとした。一方、自己との関連性の低い課題では、他者のパフォーマンスが高いほど、同測度で、被験者は他者に近づこうとした。しかし、好意度の測度においては、有意な結果は得られなかった。また、自己より他者のパフォーマンスが低い場合、関連性による違いは見られなかった。このように、自己と課題の関連性と他者のパフォーマンスによって、人はその他者との心理的近さを変化させることが明らかにされたのである。

#### (2) パフォーマンスの認知

次に、Tesser, Campbell, & Smith(1984)は、自己評価維持モデルによるパフォーマンスの認知変化の予測の妥当性を検討した。彼らは、小学校5、6年生を対象とし、心理的近さの指標として、一緒に時間を過ごしたいと最も思う級友(心理的に近い級友)、一緒に過ごしたくないと最も思う級友(遠い級友)を1人ずつ指名させた。次に、関連性の指標として、勉強、スポーツなど学校での様々な活動の中から、最も重要な活動と最も重要でない活動を2つずつ選択させた。その1週間後、生徒に、選択した活動に関して、自己、心理的に近い級友、遠い級友のパフォーマンスを5段階で評定させた。

その結果、自己と活動の関連性にかかわらず、いずれの活動においても自己、心理的に近い級友のパフォーマンスを遠い級友のパフォーマンスより高く評価した。また、関連性の高い活動においては、心理的に近い級友よりも自己のパフォーマンスを高く評価し、関連性の低い活動においては、自己よりも心理的に近い級友のパフォーマンスを高く評価したのであった。

しかし、このパフォーマンスの認知は、実際のパフォーマンスを反映したものなのか、それとも生徒の認知の歪みによるものなのであろうか。この点について、生徒による評価と教師による評価を比較した結果、関連性の高い課題では、自己のパフォーマンスを過大評価、心理的に近い他者を過小評価し、関連性の低い課題では、逆に、自己を過小評価、近い他者を過大評価していた。これにより、パフォーマンスの認知は、生徒の認知の歪みによるものであることが明らかにされたのである。

### (3) 関連性の認知

Tesser, Campbell, & Campbell(1981) は、関連性の認知が、他者の心理的近さとパフォーマンスによって影響されることを明らかにしている。彼らは、高校生を対象とし、まず、自己と課題との関連性を進学希望と学科への関心の2つの測度で測定した。次に、心理的に近い他者として、同性/同人種の級友と、遠い他者として、異性/異人種の級友を指名させた。そして、それぞれの自己報告による学業成績と、自己と学校の関連性との間にどのような関係があるかを検討した。その結果、絶対的基準による自己の成績が高いほど学校の関連性も高く、成績が低いほど学校の関連性も低いことが明らかにされた。また、他者との相対的な成績においても同様の結果が見いだされた。さらに、他者の心理的近さについてみると、心理的に近い他者との相対的な成績のみが、学校との関連性に影響を及ぼし、遠い他者の絶対的成績、相対的成績はいずれも影響しないことが明らかにされた。すなわち、心理的に近い他者よりも相対的に高い成績である場合、学校との関連性は高いのであった。このことから、課題の関連性は、他者の心理的近さとパフォーマンスの関数であると結論された。

このように、自己評価維持モデルによる仮説は概ね支持されており、人は自己評価を肯定的に維持する欲求を持ち、それを満たすために、他者の心理的近さ、パフォーマンス、課題の関連性を変化させることが明らかにされている。

### (4) 自己評価維持モデルにおける個人差研究

本邦では、磯崎・高橋(1988)が、自己評価維持モデルの追試研究を行い、友人選択と学業成績との関連性を検討している。その結果はほぼ仮説を支持したものであったが、さらに磯崎・高橋は、個人差要因としての自尊感情を組み入れ、その影響を報告している。自他の学業成績についての認知と、自己と課題の関連性との間の関係においては、仮説通りの結果、すなわち関連性の高い課題においては自己の方が優れていると認知し、関連性の低い課題においては他者の方が優れていると認知しており、これに自尊感情による違いは見られなかった。しかし、実際の学業成績と、自己と課題の関連性との間の関係においては、自尊感情の低い群において仮説通りの結果がみられたのに対し、自尊感情高群においては両要因の有意な交互作用効果は見られなかった。すなわち、自尊感情の低い人において、このような方略の使用による自己評価維持がはかれやすいと言えるであろう。

## 4. セルフ・サービング・バイアス

自尊感情の防衛あるいは高揚のためには、ある結果に対する原因の帰属対象を変えることも有効であることが指摘されている。そのなかで、ある行為を行った後で、その結果の良し悪しによって、帰属対象が変わることをセルフ・サービング・バイアス(Bradley, 1978)という。すなわち、好ましい結果が出た場合には、それを自己の能力や努力などによるものであると内的帰属を行い、それによって自尊感情の高揚をさせ、好ましくない結果の場合には、それを課題の困難さや運などに外的帰属し、その結果に対する責任や非難を回避し自尊感情の維持を図るのである。

Harvey, Arkin, Gleason, & Johnston(1974)は、恐怖症患者を治療する能力に関する研究という名目で、大学生に、セラピストと観察者の役割をわりあてた。患者は、実際には実験協力者であり、隣の部屋で筋弛緩の程度を測定する装置を付けている。被験者のセラピストは、その患者に肯定的、あるいは否定的な治療効果が期待されるものであると、実験者から教えられた教示を与える。その治療成果は、患者の筋弛緩の程度を示す装置のメーターを示すことによって被験者に伝えられた。その後、示された治療成果の責任の帰属について尋ねたところ、肯定的な治療効果が期待されていたときには、被験者は肯定的な成果について、否定的な成果よりもその責任をより多く自分に帰属した。しかし、否定的な治療効果が期待されたときには、その責任の自分への帰属において、成果による違いはみられなかった。この結果について、Harvey et al.は、患者に伝える教示を被験者自身が選ぶことができず、否定的な成果による自己への脅威が少なかったためではないかと考えた。

そこで、Arkin, Gleason, & Johnston(1976)は、Harvey et al.(1974)と同様の手続を用いて治療効果の期待と実際に観察された治療の成果を操作した。さらに、彼らは、治療の4つの方法を示し、その中から最も効果的で、実施してみたいと思うものを選択させる条件と、あるいはその4つの中のひとつを強制的に実施させる条件を設定することによって、治療方法の選択条件を操作した。その結果、肯定的な成果が実際に観察されたときには、治療効果に対する期待や治療方法の選択条件にかかわらず、その成果を自分に帰属させた。また、否定的な成果が観察されたときには、もっともらしい他の原因の説明がないときを除けば、すなわち、肯定的な治療効果を期待し、かつ、方法を自分で選択した条件以外では、成果の自分への帰属が減少したのであった。

また、Sicoly & Ross(1977) は、自己防衛的あるいは高揚的な帰属が、自己に向けて他者によってなされたとき、その正確さを評定させるという方法で、セルフ・サービング・バイアスの存在を検討している。彼らは、被験者に観察者の存在する状況で社会的感受性課題を遂行させ、偽の結果をフィードバックし、成功または失敗を経験させた。次に、その結果についての個人的な責任の帰属評定を求めた。続いて、観察者も結果についての被験者の責任の帰属評定を行い、それを被験者に渡した。しかし、実際には、観察者は被験者自身による評定結果をワンウェイ・ミラーでみており、その被験者による評定結果よりも多くまたは少なく責任の帰属を行ったのであった。そして、被験者に、観察者による帰属評定の正確さについて回答を求めた結果、観察者から成功の責任を自己により多く、失敗の責任を自己により少なく帰属された場合に、その評定に対し、より高い正確さを与えたことが明らかにされた。

ところで、Bradley(1978) は、以上で見てきたようなセルフ・サービング・バイアスの存在を支持する研究では、その実験状況が全て、観察者が存在するなど公的な状況に設定されており、したがって、そのような状況で行われる自己防衛的あるいは高揚的な帰属はひとつの自己呈示方略と考えられるとしている。したがって、失敗の原因を自己に帰属することが自己呈示の方略として採用される場合もある。例えば、Beckman(1973) と Ross, Bierbrauer, & Polly(1974) の結果はセルフ・サービング・バイアスの仮説を支持していないが、Beckman(1973) の研究では、被験者は、実験中の自己の行動とその責任の帰属評定を観察者に知られており、さらに、観察者からも自己の行動の評価をされることを知っていた。また、Ross et al.(1974) の研究においても、被験者は自己防衛的あるいは高揚的な帰属を行うことが将来的に有効でないことを知っていたのであった。したがって、これらの研究結果においても、自己呈示の方略として、仮説とは逆のセルフ・サービング・バイアスが作用していると言えるのである。

## 5. セルフ・ハンディキャッピング方略

帰属対象を変えることによって自尊感情の防衛あるいは高揚を行う行為として、Jones & Berglas(1978) によって、セルフ・ハンディキャッピング方略も指摘されている。これは、ある行為をする前にあらかじめ失敗が予想される時、その失敗の言い訳になるようなハンディキャップを自分に付けておくことを言う。

すなわち、セルフ・サービング・バイアスの作用する機会を増やす方略であるとも言えよう。

Jones & Berglas(1978) は、アルコールや麻薬依存症などの臨床例からの知見から、これらのアルコールや麻薬依存は一種の方略であろうと考えた。人は、ときには自己の特性や能力についての判別的な情報を避けようとすることがある。そして、人がアルコール等に依存するのは、失敗に関する否定的な情報を避け、成功に関する肯定的な情報のインパクトを高めるためである。良いパフォーマンスに対する障害となるものを見つけるか、あるいは作り出しておけば、失敗の原因をその障害に帰属でき、自己の能力感を守り、自尊感情を防衛することができる。成功した場合には、その障害があったにもかかわらず成功できたということから、成功原因を自己に帰属でき、自己の能力感を高め、自尊感情を高揚させることができるのである。

Berglas & Jones(1978) は、この方略を実験的に証明している。実験は、大学生を対象に、薬物が知的課題での成績に及ぼす影響に関する研究であるという名目で行われた。被験者に2つの薬を呈示し、ひとつはパフォーマンスを促進する効果をもち、もうひとつは抑制する効果をもつものと教示した。次に、知的課題を遂行させ、全被験者に高得点をフィードバックした。この際に、2つの独立変数の操作が行われている。ひとつは、課題の遂行結果についての確信とフィードバックの一致の程度であり、課題の難易度を変えることによって、遂行結果についての確信とフィードバックが不一致である水準と、両者が一致している水準が設定された。つまり、不一致条件では自己の能力についての確信がなく、高得点が運に帰属されるのに対し、一致条件では、自己の能力について確信が持たれているのである。第2の要因は、遂行結果を公表するかしないかといった、結果の相対的な公私の程度である。公的条件では、被験者は、課題で高得点をおさめたことを実験者達に知られており、薬物を飲用した後に行う第2課題でも同様に高得点をとることが期待されていると思わせる。私的条件では、被験者は、第2課題での成績は実験者に知られないと思っていた。これらの操作後、第2課題にうつる前に、促進または抑制効果のある薬のいずれを選ぶか、被験者に回答を求めた。

その結果、相対的な公私にかかわらず、不一致なフィードバックを受けた被験者は、一致するフィードバックを受けた被験者よりも、抑制効果のある薬を選択したことがみとめられた。すなわち、自己の能力に確信がないにもかかわらず高得点であったとき、その後の課題遂行前に自己にハンディキャップをつけようと



したのであった。

さらに、Kolditz & Arkin(1982) は、このセルフ・ハンディキャッピング方略が自己呈示のひとつであるとしている。彼らは、課題遂行結果の相対的な公私条件をより徹底させて操作し、Berglas & Jones(1978)と同様の実験を行った。すなわち、公的条件では、薬を選択する前の課題での成績と、選択した薬を実験者に知られ、さらにそのあとに行う課題の成績も同一の実験者に知られると教示されていた。一方、私的条件下では、薬の選択を実験者の不在中に行い、また、そのあとの課題を遂行後、その用紙を各自で封筒にいれ、研究所に郵送するよう教示された。すなわち、第2課題での成績は実験者に知られないと思われたのである。

その結果、実験者の前で薬を選択し、第2課題の成績が実験者に知られてしまうとわかっている時、最も多く抑制効果のある薬を選択することが明らかにされ、このような方略が、印象管理あるいは自己呈示の方略であると結論されたのであった。

## 6. 自己査定と自己高揚

本研究では、社会的比較過程の理論に見られる2つの自己評価の目的に関する研究、すなわち、自尊感情とは無関係に自己の能力レベルを明らかにしようとする自己評価に関する研究として自己査定理論を、自尊感情の防衛あるいは高揚を目的とした自己評価に関する研究として自己評価維持モデル、セルフ・サービング・バイアス、セルフ・ハンディキャッピング方略を紹介した。ここでは、これら自己査定と自己防衛・高揚の関係について、考察を加えることを試みる。

自己査定と自己防衛・高揚は、一方は自尊感情と無関係な人の行為を仮定し、他方は自尊感情が人の行為の方向を決定すると仮定するものであるため、それぞれお互いの基本仮定を否定し合う、対立するものように思われる。

しかしながら、Trope(1983)によれば、たしかに自己査定は自尊感情を低下させる恐れがあるかもしれないが、それは短期的なものであり、正確な自己知識があれば、自尊感情へのダメージの回避、自分が優れていることを示せる活動への従事、自分の能力に合ったレベルの課題選択、潜在的能力の現実化と発達などを可能にできる。

また、中村(1983)によれば、自己にかかわる現象は、①自己意識、②自己概念、③自己評価、④自己呈示、の順序で出現するとされている。

自己意識とは、自分自身に注がれる意識である。自

己概念とは、自己の属性や行動様式に対する認知であり、Trope(1983)の自己知識に対応するものと思われる。自己評価とは、自己の属性や行動様式に対する評価、現実の自分の価値付けであり、それを受容した結果、自尊感情が形成される。そして、自己呈示は、肯定的な公的イメージを得るための行為である。自己防衛・高揚理論のひとつである自己評価維持モデルは、自尊感情を維持するために、自己評価するための対象や領域など、その方法を変えようとするものであった。また、セルフ・サービング・バイアス、セルフ・ハンディキャッピング方略は、自尊感情を防衛する、あるいは高揚させるために作用するものであり、さらに、それは、他者から高い評価を得ることによって、自尊感情の防衛あるいは高揚をはかろうとする、自己呈示の側面を持つことが明らかにされている。

すなわち、自己概念の形成段階では、Tropeらの自己査定理論が適用可能であり、自己評価と自尊感情形成段階では、自己評価維持モデルが対応し、また、セルフ・サービング・バイアスやセルフ・ハンディキャッピング方略も有効である。さらに、自己呈示の段階では、セルフ・サービング・バイアスとセルフ・ハンディキャッピング方略が有効であろう。

このように、自己にかかわる現象の出現順序を考慮することによって、自己査定と自己防衛・高揚は対立するものでなく、自己査定が、自己防衛・高揚のために必要な知識を獲得する、自己防衛・高揚の前段階にあるものと考えることができよう。

## 引用文献

- Arkin, R. M., Gleason, J. M., & Johnston, S. 1976 Effect of perceived choice, expected outcome, and observed outcome of an action on the causal attributions of actors. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 151-158.
- Atkinson, J. W. 1957 Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, 64, 359-372.
- Beckman, L. 1973 Teachers' and observers' perceptions of causality for a child's performance. *Journal of Educational Psychology*, 65, 198-204.
- Berglas, S., & Jones, E. E. 1978 Drug choice as a self-handicapping strategy in response to noncontingent success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 405-417.
- Bradley, G. W. 1978 Self-serving biases in the attribution process: A reexamination of the fact or fic-

- tion question. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 56-71.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Gergen, K. J. 1984 Theory of the self: Impasse and evolution. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.17. New York: Academic Press, Pp.49-115.
- Harvey, J. H., Arkin, R. M., Gleason, J. M., & Johnston, S. 1974 Effect of expected and observed outcome of an action on differential causal attributions of actor and observer. *Journal of Personality*, 42, 62-77.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- Jones, E. E., & Berglas, S. 1978 Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 200-206.
- Holditz, T. A., & Arkin, R. M. 1982 An impression management interpretation of the self-handicapping strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 492-502.
- 中村陽吉 1983 実験社会心理学における自己-導入 日本グループ・ダイナミックス学会第31回大会発表論文集, S-1.
- Pleban, R., & Tesser, A. 1981 The effects of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, 44, 278-285.
- Ross, L., Bierbrauer, G., & Polly, S. 1974 Attribution of educational outcomes by professional and nonprofessional instructors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 609-618.
- Sicoli, F., & Ross, M. 1977 Facilitation of ego-biased attributions by means of self-serving observer feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 734-741.
- Sorrentino, R. M., Short, J. C., & Raynor, J. O. 1984 Uncertainty orientation: Implications for affective and cognitive views of achievement behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 189-206.
- Strube, M. J., Boland, S. M., Manfredi, P. A., & Falaj, A. 1987 Type A behavior pattern and the self-evaluation of abilities: Empirical tests of the self-appraisal model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 956-974.
- Strube, M. J., Lott, C. L., Lê-Xuân-Hy, G. M., Oxenberg, J., & Deichmann, A. K. 1986 Self-evaluation of abilities: Accurate self-assessment versus biased self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 16-25.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1982 Self-evaluation maintenance and the perception of friends and strangers. *Journal of Personality*, 50, 261-279.
- Tesser, A., Campbell, J., & Campbell, B. 1981 Some relationships among performance, interest, and friendship for high school seniors. Manuscript in preparation, University of Georgia, Athens. [Tesser, A., & Campbell, J. 1982 A self-evaluation maintenance approach to school behavior. *Educational Psychologist*, 17, 1-12. による]
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- Trope, Y. 1975 Seeking information about one's own ability as a determinant of choice among tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 1004-1013.
- Trope, Y. 1979 Uncertainty-reducing properties of achievement tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1505-1518.
- Trope, Y. 1980 Self-assessment, self-enhancement, and task preference. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 116-129.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.2. Hillsdale, NJ: Erlbaum, Pp.93-121.
- Trope, Y., & Ben-Yair, E. 1982 Task construction and persistence as means for self-assessment of abilities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 637-645.
- Trope, Y., & Brickman, P. 1975 Difficulty and diagnosticity as determinants of choice among tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 918-925.